

地域の絆を深める 伝統芸能



やまもと ひろあき
山本 浩章
ますだ
益田市市長(島根県)



な か た か つ ひ さ
中田 勝久
みなみ
南あわじ市長(兵庫県)



あおやま せつじ
青山 節児
なかつがわ
中津川市長(岐阜県)



ふ せ た か ひ さ
布施 孝尚
とめ
登米市長(宮城県)

司会・コーディネーター

いのうえ しげる
井上 繁

常磐大学大学院コミュニティ振興学研究科客員教授

古くから住民たちの生活に深く根付いてきた地域の伝統芸能。しかし、現在は演者の高齢化、少子化による後継者不足、資金不足などによって保存や継承が困難になりつつあります。そうした中、保存会の結成や人材育成、技を披露する機会の提供など、郷土芸能の振興に取り組む自治体も増えてきています。

座談会では伝統芸能の振興に取り組む布施・登米市長、青山・中津川市長、中田・南あわじ市長、山本・益田市市長にお集まりいただき、各市に根付く伝統芸能の内容、行政による支援、その効果、今後の課題などについて、幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

祭りに向けた住民総出の
山車の製作があるからこそ、
住民同士顔を合わせる
機会が増えて、コミュニティも
活性化します。



布施 孝尚
登米市長(宮城県)

古くから地域に伝わる伝統芸能

井上 古くからその土地に根付いてきた、独自の伝統芸能は、コミュニティの絆を深めるとともに、住民に誇りや愛着をもたらす大事な地域資源です。しかし、現在、後継者不足などを背景に、芸能の保存、継承が難しくなっているのも事実です。

本日は、舞台芸能を中心に、意欲的にその振

興に取り組む都市自治体の市長にお集まりいただきました。それではまず各都市の代表的な伝統芸能についてご紹介いただきたいと思います。布施 登米市は今から10年前の平成17年に9つの町が合併して誕生したまちですが、旧町それぞれに特色のある文化が根付いていました。本日はその中から市を代表する2つの伝統芸能をご紹介します。

1つは子どもたちによる7種類の「とよま囃子」が鳴り響く中、山車行列がまちなかを練り歩く「とよま秋まつり」です。この祭りに向けて、住民総出で「とよま型」とも呼ばれる独特な山車を制作するほか、子どもたちも長い時間を掛けてお囃子の練習を行います。まさに、住民が十分に手間暇掛けた、手づくりの伝統芸能と言えるでしょう。さらに、宵祭りには、藩政時代に端を発し、明治期以来、地元有志により受け継がれてきた「登米能」が演じられます。

もう1つの伝統芸能はおよそ800年の歴史を有する「米川の水かぶり」。わら装束に身を包んだ男衆が奇声を上げながら地区内を練り歩き、家々の前に用意された水を家に掛ける火伏行事です。男衆が身につけているわらを抜き取り、屋根に上げると火伏せのお守りになるとも伝えられています。長い歴史と文



330年にわたり継承されてきた「とよま秋まつり」

化を有したこれらの伝統芸能は、地域の誇りとして、市を挙げて継承に努めているところです。

青山 飛騨街道、東山道、中山道など、多くの街道を有している中津川市は、街道筋を中心に町並みが発展するなど、「街道文化」が形成されてきた都市です。そうした歴史的、地理的な背景の下、多くの伝統芸能が受け継がれています。その1つが、約400年前から地元の素人役者たちによって演じられ、継承されてきた「地歌舞伎」です。東濃地域は全国で最も地歌舞伎が盛んな土地柄ですが、中津川市内においても7団体が活動しているほか、市内には明治座、常盤座、蛭子座と、3つの芝居小屋が現存。歌舞伎や地域の行事に使われています。

またおよそ350年前に、淡路地方から伝えられた人形浄瑠璃芝居「恵那文楽」も市の代表的な伝統芸能です。街道ではないものの、遠方から人の行き来が絶えなかった恵那山のふもとと、川上地区に伝承され、住民たちの手によって代々



毎年公演が行われている「地歌舞伎」

受け継がれてきました。昭和61年には岐阜県重要無形民俗文化財に指定されています。ほかに東濃地域から長野県の一部に根付き、毎年伊勢神宮で奉納される「獅子芝居」もあります。こうした伝統芸能は市の活性化において欠かせない地域資源。できる限り全国へPRしたいと思っています。その一環で、この3月には私も地歌舞伎に出演する予定です。

中田 南あわじ市にもいろいろ伝統芸能がありますが、代表的なものを挙げるとすれば、国の重要無形民俗文化財に指定された「淡路人形浄瑠璃」でしょう。最盛期の18世紀初めには40以上の座元があり、東北から九州まで各地に人形芝居を伝えるなど、日本の演劇史においても大きな役割を果たしてきました。現在は、かつて全国を興行した大座の一つ、吉田傳次郎座の道具類を引継いだ「淡路人形座」が公演活動を展開しています。

常設館でほぼ毎日公演していること、そして、全国的にも珍しくプロの団体であること。これらが「淡路人形座」の最大の特徴ですが、市としても、この伝統芸能を絶やすことなく、しっかりと守っていかうと、年間2000万円の運営費を淡路人形座に補助してい



りニア中央新幹線の駅が設置されるわが市にとっては、これからの勝負。伝統芸能を外国の方にもアピールしていきたい。

青山 節児
中津川市長(岐阜県)

ます。

また、平成19年には、ユネスコ・アジア文化センターの「コミュニティにおける無形文化遺産の活性化の優良事例コンテスト」で入選を果たしました。学校関係者を中心に、青少年を巻き込み、後継者育成活動を進めてきたことが評価されたのですが、このように行政だけでなく、地域を挙げて継承に努めているところに特

徴があります。

山本 「石見神楽」は益田市を含む、島根県西部の石見地方を代表する伝統芸能で、出雲神楽から派生して発展を遂げました。江戸時代までは神官が上演していましたが、明治に入ると神職演舞禁止令が発布。以降、土地の人に受け継がれたことで、民間芸能としてテンポも激しく、衣装も派手になるなど、演芸的な要素が強くなりました。これが石見神楽の特徴であり、最大の魅力です。神楽団体の数は石見地方全体で100を超え、そのうち、益田市内では20以上の団体が活動しています。

さらに、人形操者、太夫、三味線、後見の4役で上演される「益田糸操り人形」も市を代表する伝統芸能です。明治20年ごろ、東京浅草で糸あやつり人形芝居を興行し、これを全国的に広めようと益田を訪れた山本三吉さんが、市内の浄瑠璃の愛好会「小松連」に迎えられたことがきっかけで、この地に伝わりました。

市としても、これら伝統芸能を貴重な地域資源として、その振興により一層力を入れているところだ。

行政としていかに伝統芸能を支えるか

井上 それぞれの地域に息づく伝統芸能についてご紹介いただきました。それでは、そうした芸能に対して、行政としていかなる支援を行っているのか、お話ししたいかと思えます。

中田 先ほど、「淡路人形座」に対する運営費の補助について申し上げましたが、平成24年にオープンした新会館も公費で設置しました。人形座はそれまで大鳴門橋記念館を拠点に公演してきたものの、観客数は減少を続け、平成



室町時代からの伝統を誇る「淡路人形浄瑠璃」

21年度以降は目標の年間入場者数8万人を大きく下回る3万人台で推移していました。そこで、拠点を福良港に移し、観光客を呼び込もうと新たな劇場を設けたわけです。

新会館の建設に要した費用は約6億円。財政難の中、さまざまな議論がありました。が、全国的にも人

観光の活性化だけでなく、地域文化の振興の観点からも、充実した支援が必要との思いから、専用劇場を設置しました。

形浄瑠璃を常設で公演しているところは文楽と私どもだけ。観光面による活性化だけでなく、貴重な文化の振興の観点からも、充実した支援が必要との考えから、国や県の補助金、合併特例債、ふるさと納税、淡路人形芝居サポートクラブやこれまでの寄附金や売上の積立金を充当するなど、さまざまな手段を駆使して財源を確保しました。

青山 中津川市においても、県の補助金と市の予算で、芝居小屋「明治座」の耐震改修工事を進めています。県産材の使用はもとより、外観を含め創建当時の姿を変えないようにとの考えから、有識者の検討委員会も設置し、施工方法も工夫しました。今年の秋には完成の予定です。
山本 石見神楽は、島根県の西部全域に根付いています。そのため、島根県と関係市町、さらには神楽団体などで広域的に連携するため、「石



中田 勝久
南あわじ市長(兵庫県)

見神楽広域連絡協議会」を立ち上げ、共同して振興策の推進、周知啓発活動などに取り組んでいます。その一環で、平成25年度から協議会の支援の下、週末夜神楽公演を行っています。非常に好評です。益田市としても、この夜神楽公演に対し、上乘せで補助を行っているほか、伝統芸能を継承する糸操り人形などの代表的な活動団体に対して、運営費を補助するなどしています。

布施 登米市に関しても、毎年、登米能が奉納される、「伝統芸能伝承館（森舞台）」を公設つくったほか、維持管理も市の予算で賄っています。とよま秋まつりに関しても、祭り全体へ補助金を交付するだけでなく、旧町単位に「協働のまちづくり地域交付金」として100万円を交付しています。地域ごとに住民が話し合っ、交付事業を決定していますが、中には祭りを使う山車の保管庫を整備する団体もあります。

多くの効果を地域にもたらす伝統芸能

井上 そうした行政の支援の下で、伝統芸能を活性化することで、地域にどのような効果が出ているのか、ご紹介いただけますか。

山本 伝統芸能は地域文化そのものですから、これを継承、発展させることは広い意味で文化振興につながり、地域の魅力を高めると考えます。併せて、芸能は観光客を呼び込む貴重な資源です。さらに、伝統芸能を受け継ぎたいという若者が増えれば、若者が地域に定着するきっかけにもなると考えています。

青山 私も伝統芸能は観光資源として非常に魅力があると思います。実際、連日のように下呂市から温泉客を乗せた観光バスが市内の芝居小屋を訪れるなど、既に観光コースにも組み込まれています。さらにうれしいのは、市民が主体的に、観光客に対してガイドをされていること。歴史的な背景を交えて、地歌舞伎についてPRしていただいています。

中田 新しい劇場を設けたことで、市民にも淡路人形浄瑠璃の振興に向けた行政の熱意が伝わったことも大きな効果だと思います。「これからは自分たちも応援していかなければ」という



山本 浩章
益田市市長(島根県)

次世代への継承のためにも、子どもへのアプローチが必要。教育と伝統文化をつなぐ仕組みづくりが必要だと考えています。

意識が高まっています。観光面においても有効です。おかげさまで新会館の設置後は入場者数も大幅に増加、今では目標とする年間入場者8万人も達成間近という状態まできました。さらに島内はもとより、島外の子どもたちにも淡路人形浄瑠璃を見てもらおうと、神戸市の教育委員会にも働きかけ、成果が上がっています。

布施 本日の座談会のタイトルにあるように、地域の絆が深まる効果も見逃せません。特にとよま秋まつりにおける住民たち総出の山車の製作は相当な時間を要しますが、これがあるからこそ、住民同士顔を合わせる機会が増えて、コミュニティも活性化するのだと思います。その恩恵を受けているのは地元住民だけではなくありません。登米市は、被災した三陸地方への玄関口に位置しているため、全国から多くのボランティア、行政職員が市内で生活しています。そうした方々にも祭りや運動会などの地域活動に加わっていただくことで、新しい絆が生まれています。

インバウンド戦略の柱の二つに

井上 観光面での効果について言及がありましたが、日本各地の伝統芸能については海外の方の関心も徐々に高まっているようです。言葉や文化の壁はありますが、インバウンドの一つの柱として有望だと思いますが、いかがでしょうか。

青山 昨年、訪日外国人旅行者数が1300万人を超えました。この流れを生かし、地域の活性化にどう結び付けるかが大きな課題です。特に12年後にリニア中央新幹線の駅が設置されるわが市にとつ



石見一円で演じられる「石見神楽」

ては、これからが勝負。近年、岐阜県からの要請で、東濃歌舞伎保存会の皆さんが上海やパリなどで公演を行い、高い評価をいただいています。これからも伝統芸能を外国の方にも大いにアピールしていきたいと考えています。

山本 石見神楽は面も迫力があるし、衣装がきらびやかで、舞のリズムも激しく、視覚的にも、聴覚的にも楽しめる芸能です。言葉の壁を越え、その魅力を十分に実感いただくことができます。毎年のように海外公演を行っています。が、熱狂的に歓迎され、再演の要請もあります。

中田 淡路人形座も兵庫県の要請で、アメリカのワシントン州など、さまざまな場所で公演を行います。アンコールも出るくらい好評です。確かに、言葉の壁はありますが、日本人でも大夫の言葉を理解するのは容易ではありません。海外の方はその分、浄瑠璃が醸し出す雰囲気十分に楽しんでいただいているようです。

布施 藩政時代から伝わる登米能も、ローマを



井上 繁
(常磐大学大学院コミュニティ振興学研究科客員教授)

はじめ、海外で公演していますが、興味深く見ていただいています。さらに、「米川の水かぶり」に関しては、現在、関連の儀式(来訪神行事)を行う9市町と連携して、ユネスコ無形文化遺産登録を目指して活動しています。ぜひ、実現させて海外へのPRにもつなげていきたいと思っています。

後継者の育成と財政面は避けて通れない課題

井上 最後に、今後、地域の伝統芸能がさらに活性化するために解決すべき課題についてご意見を伺いたいと思います。

布施 今後の課題といえば、やはり少子化と人口減少に伴う、参加者の減少でしょう。とよま秋まつりにおいても、お囃子を演奏する子どもの数が減っているほか、地区の男衆がまちを練り歩く「米川の水かぶり」においても、参加者が増えないという問題を抱えています。一方で、伝統芸能に関心を寄せる人たちが増えていることも事実ですので、いかにその人たちの巻き込み、参加していただくかがカギになると思います。

山本 子どものときに伝統芸能を体験すると、大人になってもその独特の動きやリズムを体が覚えているもの。それが地域への愛着にもつながっていきます。その意味でも、将来を担う子どもたちへのアプローチが重要です。益田市では、教育委員会と連携して小中学校でのワークショップなども実施していますが、次世代への継承のためにも、学校教育と社会教育、そして伝統文化をつなぐ仕組みづくりが必要だと考えています。

青山 おっしゃる通り、子どものときに伝統芸能を体験することの意義は大きいですね。一旦地域を離れても、小中学生のときに演じた地元の芸能が忘れられない、もう一度演じたいと考えている若者も少なくないのです。その意味でも、芸能は地域の絆とつながっています。加えて、伝統芸能は演者だけでなく、裏で支える多くのスタッフも必要です。後継者等の課題もありますが、住民たちを中心に、今まで以上の充実した体制づくりを進めたいと考えています。

山本 演者を含めて参加者は愛好家を中心。熱意と自発性だけで成り立っているのが現状です。しっかりと支えなければいけないのですが、自治体としても、厳しい財政事情の中で、どこまで支援できるか不安もあります。大きな岐路に立っていることも事実だと思います。

中田 議会の中でも、伝統芸能を守るためには、ある程度の支援は必要との考えがある一方、継続的に支援をすることに疑問を感じている方もいらっしやいます。後継者問題と維持するための運営費の問題は決して避けて通れない問題ですから、しっかりと議論を深めていく必要があると思います。



井上 さまざまな悩みを抱えながら、伝統芸能の振興に取り組んでおられる様子がよく伝わりました。言うまでもありませんが、伝統芸能は地域文化の資源であり、地域の絆を深める上で大きな役割を果たしています。これまでのまわづくりは経済面がことのほか重視されてきました。もちろん、経済は大事ですが、近年は文化の香り豊かな地域に、人々は魅力を感じる時代に入りつつあるのではないかと感じます。今後、地域住民や関係団体と力を合わせ、伝統芸能の振興に取り組んでいかれることを願っています。本日は長時間にわたってどうもありがとうございました。

(平成27年1月28日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は5月号に掲載予定です。

